

<p>年末のミンダナオ島台風被害に対してご心配いただきありがとうございます。被災地は北部に集中し、南部の支援地域は台風被害はありませんでした。自然の猛威との対峙が避けられない以上、人災部分を減じるため、私たちが微力ながらミンダナオで緑の修復を続けたいと思います。</p>	 <p>2012年1月25日発行</p>	<p>NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会 (英文名略称・HANDS) 本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11 TEL:045-962-0824 FAX:045-962-1933 E-mail: hands-mindanao@nifty.com http://homepage3.nifty.com/hands/ 郵便振替口座 00210-5-72693 (加入者名) ビラーンの医療と自立を支える会</p>
---	---	--

ティボリ民族の町レイクセブと日本の支援

11月末のミンダナオ訪問二日目、レイクセブ町に着いた私たちは湖畔の船着き場に直行。町長アントニオさん、農業課長ザルディさん、PFPのロニーさん等と小舟に乗り込み、セブ湖で一番大きい島ティバウに向かいました。希少な熱帯の生態系を回復するため、熱帯林再生と島民の持続可能な収入向上事業への協力を求められた島です。日程の関係もあり、島民へのヒアリングは次回にまわして、島の周り約3kmをゆっくり一周しました。熱帯林も残っていますが、焼き畑や地滑りのあとなど茶色の山肌がところどころ露出していました。

湖岸には、竹とコゴングラスでできたティボリ伝統の家が小さな集落を作っているのが見えました。対岸の船着き場付近に広がる淡水魚ティラピアの養殖いかだは、ここにはありません。いかだ建設と稚魚購入の費用は最低1万ペソです。資金がない島民にはやはり焼き畑に頼るしかないのでしょうか。24年前にJOFPA(後述)会員として初めて訪れた時みた風景を思い出しました。



町長(右)と農業課長。2人とも元SCM教師で、SCMスタッフだったPFPのロニーさんの元同僚です。

現在レイクセブ町は「サウスコタバト州の夏の都」と呼ばれる観光スポットになっていて、特に夏休みの4、5月は学生や官公庁の研修などでにぎわいます。私たちが応援しているCOWHEDの店舗もその恩恵を受けています。

町の発展の始まりは1960年代初め、この地に入ったカトリック宣教サンタクルスミッション(SCM)の人道支援です。ティボリ人の先祖伝来の土地を開発業者から守り、民族文化継承を支援する姿勢に共鳴して、国の内外から人材や資金が集まりました。特に故藤原輝男氏が1980年山口県に設立のチボリ国際里親の会(JOFPA)は、最盛期の1990年前後には、SCM運営の計35校(小学校26・ハイスクール8・カレッジ1)を支え、子どもたちの就学率は著しく改善されました。

公立校が増えて日本の支援による私立校の役割は漸減し、JOFPAはこれからのティボリ民族支援のあり方を検討しています。教育を受けたティボリ人が町の要職につき、湖畔のペンションや舗装された道路沿いに土産物店が並ぶ状況を聞いて、支援はもはや不要の声もあります。しかし、ティバウ島に見るように、持続可能な生計の手段を持たず、焼き畑拡大によって熱帯林消滅に手を貸す貧しい住民がまだいます。「先祖伝来の土地保証」を受けながら、わずかな現金と引き換えに観光等の開発業者に土地使用権を譲渡してしまって、自給作物栽培にも事欠くケースも多いと聞いています。格差の拡大と環境破壊の問題はむしろ増えているようにもみえます。

1月6日、ティバウ島の事業への助成を申請していたイオン環境財団から助成決定のメールが届きました。今年は、私たちHANDSが関わっているビラーン民族等のより深刻なニーズに引き続き対応しながら、日本の教育支援の歴史が長いこのレイクセブでも、ロハス、ダグマ両山系でのPFPとの協働事業の経験を生かして、環境修復と住民の収入向上の手伝いができたらと思います。(山崎)